

# III. ガーナ現地研修の様子と受講者の学び

※ 現地研修の「研修報告書」を一部編集して掲載した。  
なお、訪問先の番号は、P.4 の現地行程表の番号と一致させています。

[ 7/28 (月) ]

## ① JICA ガーナ事務所 (概要説明、安全・健康対策、ガーナの教育)

ガーナ到着後、すぐに JICA ガーナ事務所へ。田中次長はじめ 4 人の方に、ガーナの現状や生活の工夫についての説明をもらった。ガーナは治安がよく、政治が安定している。英語が公用語でもあり、「西アフリカのエントリーポイント」「西アフリカ民主主義のリーダー役」などと言われる。2010 年には石油商業生産も始まり、2011 年にはアフリカ最大の経済成長率 14.4% を記録した。しかし、燃料代が高騰し、物価高が激しくここ 1~2 か月だけでも 20% 上昇した。南北格差が激しいし、インフラ・公共サービスも不十分である。ガーナにはまだまだ課題が多い。安全・健康対策については、「火の通ったものを食べる」「水はボトルウォーター」「辛いものに気をつける」「熱帯性マラリアは怖い。治療が遅れると死ぬ。」「夜は出歩かない」「車優先社会である」などを教えてもらったが、実際はその通りには生活できなかった。教育については、「男女格差がある」「理数調査で 42 か国中最低点」「教師の質が問題」「教材の未整備」「もともと読み書きの習慣がない」「計算を教えるのが主」などの話があった。この時はよく分からなかったが、研修をしているうちに、その意味がだんだん分かっていくことになる。



[ 7/28 (月) ]

## ② マリナモール

ラマダン明けで人が多くて治安が心配ということで、アクラモールの予定が変更になった。アクラモールもマリナモールも近代的なショッピングモールで、今回訪れたマリナモールの方が規模は小さいとのことだった。翌日の飛行機移動が早朝なので、ホテルで朝食を食べられない場合に備えてモールの中のスーパーで食品を買うこととなった。モールの入り口にはたくさんの自家用車やタクシー。マイクロバスから自分達が降りるとタクシー運転手らしき人が声をかけてくるが足早にモールに入る。モールの奥がスーパー。入口で大きなカバンは預けるシステムだが、短時間なのでスーパーに行く人とカバンを見ている人に分かれて動く。ざっと商品を見て回った感想としては、食料品から日用雑貨まで品数は揃っている。チョコレートは輸入品が多い。セディで日本円に換算すると…慣れない計算にちょっと戸惑う。輸入品は日本より高く、パイナップルな



ど地元でとれたものは日本より安い感じ。モールもいいが地元の市場も見てみたくなった。

[ 7/29 (火) ]

### ③農家訪問／青年海外協力隊（農産物加工）活動

アダンシノース郡にある食糧農業事務所を表敬訪問した後、一行は現地の農家を訪問した。訪問先は、いくつかの家族(親族)によって一つのコミュニティが形成されており、一見すると小さな村のようであった。ここで私たちは、オレンジやパパイヤ、カカオなど、複数の果実が栽培されている広大な農園を一つひとつ回りながら、青年海外協力隊の三上志保さんから、作物の栽培状況や隊員としての活動



内容などについて学んだ。彼女は、新規開拓でこの地に入り、文字通り「ゼロ」からのスタートで、村々を回りながら農業指導をしているとのことである。現在は、収穫された作物のうちおよそ半数が廃棄されているという現状を改善すべく、各農村でジャム作りのワークショップを開催しながら、商品化に向けた活動をしているそうだ。そんな三上さんの献身的な活動ぶりに、私は心から感動した。彼女が農民から受け入れられ、深いつながりを築いていることは、村の家長が幾度となく叫ぶ「シホー、シホー！」と呼び声からも理解できた。

[ 7/29 (火) ]

### ④-1 現地の方の自宅でのフーフー作り&子どもとの交流

農場で農家の人達と、フーフー作りの体験をした。フーフーの原料となるカッサバを臼の中に入れて潰す。日本の餅つきの要領と同じで、途中で、手でフーフーを返していた。日本の杵と違い、縦に長くとても重かった。つき方は、杵を真っ直ぐに落とすようにつく。体験させてもらったが、垂直に落としてつくのが上手くいかず、難しかった。柔らかくなったフーフーを、パーム油や香辛料で味付けし



てあり、魚が入っているスープの中に入れて、手で食べた。現地の人はこちらをシチューと呼んでいた。味はレッドカレーのような味で、食べやすかった。その後は、たくさん来てくれた農家の子どもたちと一緒に遊んだ。ガーナに来て初めての子ども達だったので、私達のテンションは高く、キャッチボールや紙風船や縄跳びやシャボン玉を一緒になって楽しんだ。とても無邪気な子ばかりで、好奇心も高く、特に紙風船は初めてのだったらしく、興味津々に楽しんでいた。

[ 7/30 (水) ]

### ④-2 現地の方の自宅でのバンクー作り体験

青年海外協力隊の吉田華奈さんのホームステイ宅に伺うと、笑顔のすてきなお母さんが出迎えてくれた。玄関先にある釜戸に薪をくべ、大きな鍋で2日ほど発酵させたメイズ（トウモロコシ）の粉の

練りものに少しずつ水を加え、大きなヘラでこねる。これがガーナ人のソウルフード、バンクー。鍋は器用に足で固定し、焦げないように底からしっかりと混ぜる。徐々に水分がぬけ、最後はマッシュポテトのようにポテツとなるまで煮詰めた。一見簡単そうに見えたこの作業、私たちも順番に体験させていただいたが、なんのその、とても力が必要。鍋の側面をつぶすように混ぜるのだが、男性陣ですら苦戦。それを見て楽しそうに笑うお母さん。できあがったバンクーは一人分ずつ袋に入れて丸める。働き者のお母さんの手の皮は分厚く、熱いものを持ってても平気のようだ。それをお母さん特製の魚のダシが効いたスープにつけて食べる。フーフーよりも酸味があり、少し苦手な人もいたが、この味はクセになる。このスープに茹でたオクラが合い、とてもおいしかった。



[ 7/30 (水) ]

## ⑤学校訪問 / 青年海外協力隊 (小学校教諭) 活動

青年海外協力隊の吉田華奈さんが活動されている教育事務所ですべての職員全員での歓迎を受けたのちに徒歩で今回訪問する学校に移動した。我々が来るといことで近隣の学校に声を掛けて頂いて100人以上の小学生から中学生が集まった。学校側からはリズム楽器や歌を用いたキリスト教の音楽法要で歓迎してもらい、我々も一緒に踊った。我々からは空手の演舞・幸せなら手を叩こう(現地語)・チェチェコリを披露し子ども達も一緒に踊り歌っていた。その後は日本文化・遊び・体育会系3つの活動に分かれて子ども達と交流した。遊びや運動のもつ根源的な楽しさはどこに行っても同じであり、相撲や折り紙が文化を超えて異文化交流の手段になることは見ていて興味深かった。その後は教員との意見交流会があり、ガーナの未来や教育課題などを聞くことができた。不運にもサッカーの活動中に怪我人が出てしまったが吉田さんを始め JICA スタッフの加藤さんや現地の教育事務所の方々迅速に事細かに対応してくださり感謝するとともに、現地の人々との信頼を感じた。



[ 7/31 (木) ]

## ⑥天水稲作持続的開発プロジェクト

赤まるで日本の水田のような風景だった。農家の人はとても幸せそうだった。収入が増えて子どもをインターナショナルスクールに通わせることができたと話していた。自信に満ちあふれていた。しかし、産業構造が高度化していけば、就農者は減っていく。私も農家に生まれたが、違う職に就いた。やがてガーナでも日本と同じような後継者不足が起こるだろう。日本の農業は機械化が進み、作業も楽になったが、ガーナはまだ手作業での重労働だ。やがて機械化は進んでいくだろうが、その機械化までどれだけの時間を要するだろうか。日本の一農家の歴史を辿ってみても、数十年かかっている。一農家の倅の歴史は、日本の高度経済成長期に始まっている。その日本でさえ数十年かかったのに、



ガーナでは、と心配になる。それでも、いきなり機械を導入するようなことはしない。現地調達、現地にあった経済成長を共に考え、持続可能な開発を支援していく。開発支援には「忍耐」が必要だ。教育も同様だ。

[ 7/31 (木) ]

## ⑦セント・ルイス教員養成校／シニア海外ボランティア(理数科教師)活動



ガーナの2名のシニア海外ボランティアは鈴木光次郎さんと平野さんの二人。予定には入っていたが、平野さんとは一度も会うことがなかった。鈴木さんは沖縄での教師経験を経て、退職後、ガーナで理科教師をやっている。ほとんど話す機会はなかったが、教材や授業のことを語る様子から、60代とは思えない、バイタリティや積極性を感じた。協力隊の広報誌「tro-tro」にもたびたび登場するし、食事会でも愛嬌をふりまき、周りから「すーさん」の愛称で呼ばれる親しみやすさもあって、シニア海外ボランティアとしてまさに適任な方だと感じた。収入はほとんどないというシニア海外ボランティアであるが、現地の貴重な戦力として活躍されている印象を持った。鈴木さんが活躍するセント・ルイス教員養成校はちょうど夏休み中だったが、課外授業があるようで、他の学校からの学生が大勢来ていて、それぞれの教室で講義を受けていた。



[ 7/31 (木) ]

## ⑧JICA ボランティア、専門家との懇談会

これまでにお世話になったクマシで活躍する JICA の専門家1名、青年海外協力隊の方2名、シニア海外ボランティアの方1名と一緒に中華料理店で懇親会が行われた。昼間はそれぞれの研修先で活動の説明をしていただいたり、私達が質問したことに答えていただいたりした。そこで懇親会では逆に私達が JICA の4名の方から「研修に参加したきっかけ」「ガーナの印象」「日本の子に伝えたいこと」という質問をいただき、一人ひとりが話した。懇親会は終始リラックスした感じで、JICA の方々の今に至る経緯もじっくり聞くことができた。JICA の方々こうした時間を過ごす中で、世界で活躍する人は志や信念、語学や専門知識・技術ももちろん大事だが、どこでもしっかり食べることができ、誰とでも笑顔で接することができるという人なんだとしみじみ思った。帰国したら日本の子ども達に、ガーナについてはもちろん、ガーナで活躍する素晴らしい日本人についても紹介したいと強く思った。

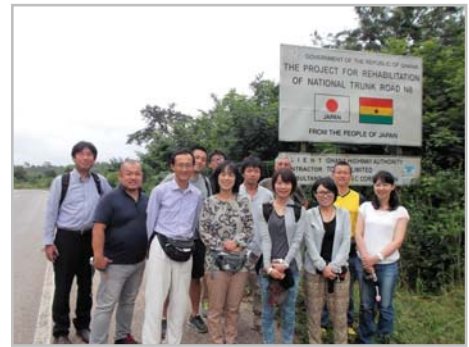


[ 8/1 (金) ]

## ⑨国道8号線改修計画プロジェクト

ガーナの道路は実に多様であり、舗装道路もあるが未舗装道路も依然と多い。また、舗装道路を見ても、至る所に穴ぼこが空いていて、迂闊にその穴に落ちればパンクするばかりが事故の原因にもなる。そのような状況の中、日本の無償資金協力によって作られた国道8号線の素晴らしさは、大変際立っている。実際にその道路を通ると、自動車の騒音や振動が圧倒的に少ないことを実感する。また、路肩を見てもその施工技術の素晴らしさは素人にも分かる。

バスに乗って国道8号線の素晴らしさを体感しながら、改めて日本人の技術力の高さを認識した。しかしながら、この国道8号線は、無償協力の在り方を別の視点から考えさせられるきっかけにもなった。ガーナの国道のうち、日本の援助による道路はほんの一部である。国内道路の大半は相変わらず穴ぼこが点在する状態である。これでは何だか、国道8号線が日本の高い技術力を誇示するだけの存在にも映ってしまう。「魚を与えるのではなく、その釣り方を教えることが本当の支援だ」という観点から、こうした無償協力における課題を改めて考えさせられた。



[ 8/1 (金) ]

## ⑩カクムナショナルパーク

Jクマシからケープコーストに向かう途中に寄ったカクムナショナルパーク。「熱帯雨林の樹幹の上に吊り橋を渡し、その上を歩くことができるツアーが評判」との触れ込みであったが、資料も表示も説明もほとんどないので、熱帯雨林の様子を見学することはできても、その樹木の名前や林の成り立ち・働きなどについて学ぶことはできなかった。せっかく40セディも払っていただき高いところまで登山したのだから、吊り橋を渡るだけでなく学びの場面がほしかった。それでも、案内してくれた若者ガーナ人のユーモアあふれる言動や、雨上がりのぬかるんだ坂道を、ズボンを汚しながら登る苦労、吊り橋から見る壮大な景色は、思い出に残るものとなった。



[ 8/2 (土) ]

## ⑪ケープコースト城

ホテルから移動する車中は、世界史の先生による奴隷貿易に至る歴史の復習タイム。そしていざ城へ。ガイドさんの話を英語の先生が同時通訳。城の地下は暗くて湿っぽい。この土や壁には、奴隷としてつれてこられた大勢の人の悲しみ、苦しみ、怒り、無念さがしみ込んでいると思うと本当に胸の詰まる思いがした。特に女性に対する仕打ちは、同じ女性と





して言葉にならない屈辱的なものだった。博物館には奴隷と交換された品々や奴隷を売る広告もあった。ガイドさんによると、ガーナでは学校で奴隷貿易について学ぶ機会はあるが、学校に行っていない子もいるし、学ぶ内容も学校それぞれらしく、どの程度ガーナの人が理解しているかはよく分からないようだ。また見学には世界各地から大勢の方が訪れるが、国や人種によって受け止め方に違いがあるようだ。自分自身の受け止め方も歴史を勉強することで変わってくると思う。帰国したら世界史の先生から紹介された「砂糖の世界史」からもう一度奴隷貿易について勉強しようと思った。

[ 8/3(日) ]

## ⑫-1 アクラのローカルマーケット

この日は日曜日。キリスト教徒の多いこの国で、今日は安息日である。予想通り、当初の訪問先であるマコラマーケットは休みであった。そこから歩いてすぐの通りでマーケットが開いているということで、一行はそこへ向かった。雨上がりということで未舗装の路面はぬかるんでおり、そこからヘド口臭が漂っている。マーケットの各店には、靴や鞆、衣類など、実に様々な商品が並べられている。しかし、その商品をよく見るとその多くが中古品であった。自転車に至っては、廃棄物のように積み上げられている有り様だ。リサイクルという観点では健全とも言えるが、実際には、経済的・流通的な問題から止む無く中古品を扱っているのであろう。マーケットの奥に進むと、聾啞者が営む店が一軒あった。そして、そこでは聾啞の人たちが集まって、手話で会話を楽しんでいた。障害を持つ人たちが、コミュニティの中に溶け込んでいる様子が印象的だった。さらにマーケットの駐車場に目をやると、そこには下肢の不自由な人たちがスケートボードのような物に乗って、サッカーに興ずる姿があった。そのような風景を眺めながら、「豊かさって一体何だろう？」と自問する日曜の朝であった。



[ 8/3(日) ]

## ⑫-2 野口英世研究室

病院の敷地内にあった。研究室の隣には、日本庭園が作られていて、その中に野口英世の像が建てられている。この庭園は、野口英世のふるさとである福島の様子が再現されていて、灯籠や石・植物などは地元福島から運ばれたものだそうだ。研究室は狭く、その奥に小さな博物館があった。野口英世に関わる資料がいくつかあった。その中でも印象的だったのは、黄熱病の研究をしている最中に自らも黄熱病にかかってしまい、悪化していく自分の体温を計測したものや、死後の英世の臓器などを研究した資料や写真が展示してあった。同じ日本人として、ガーナ人のために命を捧げた野口英世をととても誇らしく、私たち日本人が知っておくべき人物だと思った。



[ 8/4 (月) ]

## ⑭ ガーナ由来薬用植物による抗ウイルス及び抗寄生虫活性候補物質の研究プロジェクト

ガーナは西アフリカの医療面では中心的な立ち位置にある国であり、アフリカの伝染病の研究の中心地である。そしてその研究が行われている施設の一部は日本の研究機関の協力で設立された野口記念医学研究所であり、国と国以外での国際交流の一環で設立した物だと井戸栄治さんにお話をいただいた。また交流は施設のみにとどまらず定期的



に人事交流で日本の研究機関に受け入れることもしているという。日本からも伝染病と寄生虫の研究をされている鈴木さん夫婦やガーナ由来の植物から HIV ウイルスに効果のある薬剤を研究している堀さんのお話を聞くことができた。折しも西アフリカでエボラ出血熱が流行の兆しを見せ始める時期の中、今まさに伝染病と戦う現場を見ることができた。しかしながらアフリカでの家畜の伝染病を解決すれば世界中の食料事情が大きく改善すると言われながら、利益が出ないために製薬会が大きく動かない現状の話聞き、1,000 人のアフリカ人がエボラ出血熱で命を落としても動かなかった製薬会社が 1 人の先進国の為に大きく動いたことに命の重みの違いを感じずにはいられなかった。

[ 8/4 (月) ]

## ⑮ 太陽光パネルプロジェクト

日本から 6.1 億円の無償資金協力を得て 2010 年にスタートしたプロジェクト。二基目の建設が完成し、8 月 12 日に引き渡し式が行われた。一基目は 315、二基目は 405、合計 720kW を送電できるようになり、隣接するアクラ大学野口記念医学研究所の昼間の電力をすべてまかなえるようになった。これで年間一千万円程度の節約になっているとのこと。太陽光パネルの寿命は一般的に 20 年から 25 年だが、土台とパネルは日本製を使用しているため、メンテナンス次第でさらに長く使えるそうだ。驚いたことは、このプロジェクトの現場で指揮されていたお二人の日本人は 60 歳を超えたベテランであったこと。時に 40 度を超える暑さの中、言葉や文化の違うガーナ人に仕事を教える際の苦労を話してくださった。「一度に 2 つのことを伝えることは難しく、一つずつ教えている。しかし、労働者が毎日変わり、また一から教える。その繰り返し。」日本の高い技術をもったたくましい人材は、日本の宝だと思う。



[ 8/5 (火) ]

## ⑯ テテクワシカカオ農園

アクロポンという地名のとおり、平地が多いガーナには珍しく、小高い台地の上に町があった。ア

ニム運転手が操るバスは、坂道を登っていった。やはり上から見下ろす景色はいい。山間の集落が箱庭のように見える。よく見れば、小さな宿屋（ペンション）も多いようだ。さしあたり、このアクロポンは静岡でいうところの御殿場高原・朝霧高原・それとも伊豆高原か。首都アクラの避暑地的な役割もある町のような。そんな一角に、ガーナで初めてカカオが栽培されたという「テテクワシ・ココ農園」があった。ガーナではカカオのことをココと呼んでいる。今やガーナ=ココ、ココ=ガーナとまで言われるようになったガーナのココ。さしずめ「ここは、ココの聖地」といったところだ。フォメナのおセイさんの農場にもカカオはあったが、さすが聖地のカカオの方が、成りが良いような気がした。



[ 8/5 (火) ]

### ⑰伊藤忠商事によるカカオ輸出関連の講義

伊藤忠商事の神保さん。夫がガーナ人。カカオ豆の卸売などに関わっている。日本人は高くてもいいものを買うので、日本が輸入するカカオの8割はガーナ産。ガーナでは、カカオの生産の9割を小規模農家が行っている。児童労働については、東京書籍の中学英語教科書 New Horizon 3年の教科書の中で取り上げられたり、堀米薫さんの「チョコレートと青い空」という書籍も紹介されたりしていたが、子どもが家族の仕事を手伝うのが日常的なガーナで、児童労働か否かの判別はむずかしいと感じた。カカオはカカオボード（国営）により生産管理され、買い取り価格が一定なので収入が安定する。ガーナ国民の半数がカカオ生産に関わっているという。IMFの援助も受けているというが、国がバックアップしている状況はガーナにおけるカカオの品質の信頼性やカカオに賭ける意気込みを感じさせた。



[ 8/5 (火) ]

### ⑱チョコレート工場

工場に着くと最初に目に飛び込んできたのはカカオが貯蔵された高くそびえる塔。その荘厳さはお菓子工場という感じではない。しかし車から降りて敷地を歩くと、そこかしこから漂うチョコレートの甘い香り。「ああ～幸せ」と思わず笑みがこぼれる。工場内に入るためにネットをかぶり、白衣を着る。まずは農家から運ばれてきたカカオから不純物を取り除き、加熱・粉砕する過程を見る。皮は輸出して肥料にするそう。次に液体となったカカオに圧力をかけてカカオバターを絞ると、残りはカカオパウダーになるということで、無駄にするものはない（トラックからカカオを移動させる床には大量のカカオが落ちていたが…）という説明だった。工場内はほとんどが機械化





されていた。工場では材料の配合を変えて国内用と輸出用のチョコレートを作っていた。国内用は高温でも解けない配合で、食べ比べてみると輸出用の方がなめらかだった。どちらのタイプも本場の「ガーナチョコレート」は日本のものより甘さ控えめであった。

[ 8/5 (火) ]

## ⑩カカオ残留農薬検査能力向上プロジェクト

みんなが大好きなチョコレート。日本は、その原料であるカカオ豆の70%をガーナから輸入している。本日一行は、カカオ豆の生産から加工、輸出までを管理している政府関連機関「ココボード」を訪問した。チョコレート好きにとっては聖地とも言える場所である。実際の検査場を見て驚いた。検査には想像以上に厳しい基準が設けられており、各検査工程は非常に細かく分類され、職人のような検査官がナイフを使って一粒ずつ豆を検査している。ガーナ産カカオ豆の品質が高いという所以はここにあったのだと納得した。その後、一行は残留農薬の検査能力向上プロジェクトの中心となっている研究施設を訪問した。ただし、現在は新しい施設建物の建設中であり、一時的に使用している施設へ案内された。研究施設では、白衣を着た研究者によって、残留農薬の検査能力向上に関する説明を受けた。医療機関と勘違いしてしまう程の充実した設備の数々を見て、世界中で愛されているチョコレートにも日本の高い技術力が用いられていることを知り、改めて日本の素晴らしさに感心した。



[ 8/6 (水) ]

## ⑪JICA ガーナ事務所関係者との夕食会

今回の研修の食事の大部分を占める中華。ボランティア・専門家との夕食会に続き、この夕食会も中華だった。ガーナの金や石油の採掘では中国の進出が目覚ましいと言いが、こんな所にもアフリカへの中国進出を感じる。この日も新たな出会いや親しくなる機会をもらった。JICAの関係者と会うと、それぞれの経歴が波乱に富んでいたり国際的であったりして刺激的である。マラリア感染し死を覚悟した方や、アメリカ人の夫を亡くし子どもはアメリカに住み単身ガーナで仕事をしている方、エボラ出血熱の流行で走り回っていて食事会に遅れてきた方など、いろいろな方と話をした。今回の研修で出会った日本人の方に共通していること、それは「アフリカに偏見を抱いていないこと、むしろ興味を持ち自分の力をそこで生かそうとしていること」「日本と全く違う土地であっても恐れることなくそこに溶け込み順応していること」。誰でもできることではない。



[ 8/5 (水) ]

## ② JICA ガーナ事務所報告会

報告会では一人5分程度で今回の研修で学んだことを発表した。同じ日程の研修を受けても、一人ひとりの思いや感じ方はやはり少しずつ異なるものだと言った。仲間の発表を聞いて思う。しかしどの人にも共通していたのが、ガーナで活躍する JICA の方々から受けた感動や尊敬の気持ち、今回の研修に対する様々な配慮への感謝の気持ち、そして帰国したら必ず子ども達に JICA について熱く語るという決意だった。最後に JICA の方から子ども達に「楽しいガーナ」「ありのままのガーナ」を伝えてくださいとエールをいただき報告会は終了となった。発表内容は事前に考えていたものの、いざ話し始めると研修で感じた様々な思いが湧いてきて、思いがけず涙腺が緩み全くうまく話せなかった。それぐらい今回の研修が充実したものだと言ったと受け止めていただけたらと思う。同時に研修で学んだことをしっかり教材化し、子ども達に還元するという自分たちの使命を改めて強く認識した。



[ 8/5 (水) ]

## ③ おはようマーケット、グローバル・ママスの店

研修最終のプログラムとなった。待ちに待ったショッピングの時間である。1軒目は、日本人が経営する「おはようマーケット」。この店には、民族的な服や民芸品、シアバター製品などが売られていた。誰もがガーナセディを使い切る勢いで必死に品定めをしている。しかし、ここでちょっとした問題が発生した。一人の会計に想像以上の時間がかかっているのだ。店員をよく見ると、販売する品の品目や個数を台帳に手書きで記入している。これでは予定通りに進まない。考えた挙句、私たちは「まとめ買い作戦」に出ることで難を逃れた。2軒目は、グローバル・ママスというお店だ。そこで日本人を発見。聞くと3年前に青年海外協力隊員としてガーナ赴任の経験があるとのこと。「一度アフリカの水を飲んだ者は再びアフリカに帰る」という言い伝え通りである。ということは、私もいずれこの地に戻ってくることになるのか。3軒目に行った店はワイルドゲッコー。個人的には最後に訪れたこの店の品々が一番魅力的であった。私はここでコーヒー豆を購入したのだが、それが非常に美味しいコーヒーで、帰国後にその生産者にメールを送り、再び購入するほどであった。



[ 全般 ]

## ● ガーナの移動途中

ガーナでの研修を振り返るにあたって、バスの中の出来事は絶対に外せない。バスの移動中は、本当に様々なことをしていた。食事や睡眠だけでなく、歌の練習、研修の振り返り、ケープコーストの世界史講座など、移動中は仲間との絆を深める時間でもあったと思う。4～5時間の移動でも、嫌な思いをせず、お腹が痛くなるくらい笑ったり、真剣に語り合ったりできたことは、かけがえのない思い出である。またガーナではバスが止まる度に、多くの物売りに囲まれる。最初は少し怖かったが、手を振れば振り返してくれたし、ジェスチャーで会話をすることもできたので、ガーナ人とコミュニケーションを取れる機会にもなった。そして何よりバス移動は、私たちにガーナの様々な風景を見せてくれた。都心から農村に向かう町並み、緑豊かな森や凸凹道、立ち並ぶお店、棺桶屋など、研修先だけでは見えないガーナの人々の暮らしを見ることができた。



[ 全般 ]

## ● ガーナでの食事

ガーナの食事は、主に4種類をローテーションしていると聞いた。フーフー、バンクー、オムツォー、ジョルフライス。基本的に、辛みのあるスープに手を使ってつけて食べるスタイルであった。自分だったら飽きが来そうであるが、ガーナの人々は「すぐにおなか一杯になること」を食事の第一条件であると考えているらしく、種類の多さや味などは二の次であることが分かった。ただ、日本の「きね」と「うす」みたいなもので材料を練ったり、燃料となる木を並べてでっかい鍋で温めたりと、手作り感や出来立ての香りは、日本に勝るのではないかと思った。また、アポー、カカオ、プランテーン、ココナッツなど甘めの果実はいたるところに豊富になっており、ガーナ人は視察途中でも、ちぎりは食べ、ちぎりは食べと、食べ放題の様子であった。私たちもたくさんいただいたのだが、どの果実もさわやかな甘さでとても食べやすく、おかわりを求めるくらいのおいしさであった。

